

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究(2)——人間経済における負債の多元性，相克，創造性」2024 年度第 1 回研究会（通算第 7 回目）

開催日時：

2024 年 7 月 6 日（火） 10:00～17:15

場所：

AA 研マルチメディアセミナー室（306）、オンライン会議室

プログラム：

1. 司会 開始の挨拶
2. 難波美芸（鹿児島大学）「日本の ODA から考える完済できない／する必要のない負債について」
3. 山本真鳥（AA 研共同研究員，法政大学）「ヒエラルキーと再分配」
4. 柿沼陽平（早稲田大学）「中国における貨幣の起源？」
5. 佐久間寛（AA 研共同研究員，明治大学）「ポスト・ヒューマン時代の〈人間経済〉：構想と展望」
6. 全員 総合討論

参加者：17 名

概要：

2024 年度第 1 回研究会を上記の日時およびスケジュールのもと実施し、17 名が参加した。本研究会において、まず難波は、贈与の観点から日本の ODA をめぐる負債について報告を行った。次に山本は、ポランニーとサーリンズの再分配に関する議論の検討、およびかかる議論とヒエラルキーの概念との突き合わせを行った。さらに柿沼は、中国古代における貨幣経済の持続と転換の問題について検討した。そして佐久間は、研究会の中心テーマである「人間経済」についての今後の展望を説明し、そのうえで本年度および来年度以降の計画について議論した。最後に参加者全員で、かかる計画の方針の確認、および本研究会に直接関わる計画・進行中の事業に対する意見交換を行った。司会は佐久間と箕曲が務めた。各報告の概要は下記の通りである。

（文責 吉村）

日本の ODA から考える完済できない／する必要のない負債について

難波美芸（鹿児島大学）

本発表では日本が行ってきた ODA に注目し、債務帳消しの必要性を訴える世界的な運動が起き

ているなかで、国家間の負債についてどのように考えていくべきか、歴史的な流れと理論的なレビューを行った。円借款によって貸し付けた資金は、基本的には返すべきものとする日本の ODA の「自助努力」という公的言説は、ODA のアンタイド化が進められた後にも発せられ続けていたことを確認した上で、これを ODA をめぐる社会科学の議論の潮流に位置付けるべく、(1) 事実上の債務帳消しを目指した HIPC イニシアティブの効果に関する議論、(2) 等価交換ではなく、異なる指標を用いて返礼する贈与交換としての ODA に関する議論、(3) 「自助努力」という日本の価値観が援助の現場に現れる民族誌的研究の3つを紹介した。HIPC イニシアティブについてはそれによって対象となる貧困国の経済状況がさらに悪化するといった批判が出されるなか、債務帳消し自体が解決策として有効なのかが問われていた。そこで、債権放棄という支援の形ではなく、資金援助をする側もされる側もそれぞれの「国家」をモラルエージェンシーとして捉えた上で、国家間の負債をより互酬的なものとしていくための指標が国際関係論やポリティカルエコノミー論から出された。ここでは、ODA の在り方として等価交換的な返済ではなく、債務国側だからこそ債権者に与えられるものによって返す、という議論がなされた。そこでは、世界銀行や IMF に一度先進国が資金をプールした上で途上国支援を行う再分配の方法がヒエラルキーを生み出すこと、「相手の顔が見えない」ことが関係性の構築を阻んでいるとして批判された。だが、そもそも二者間の限定交換として ODA を捉えるのではなく、一般交換として捉える視点の方が、より日本の ODA が戦後一貫して表明してきた「自助努力」という価値と通じ合うのではないか。本発表では最後に、そのような途上国支援の事例を ODA ではなく NGO の先行事例研究から、ある種の原初的負債の感覚が持続的な関係性を生み出し、維持するという議論を紹介し、日本の ODA を担ってきた戦後世代の「戦争責任」という負債が生み出す日本によるアジアでの ODA の一般交換的な分配の可能性について検討した。

(文責 難波)

ヒエラルキーと再分配

山本真鳥 (AA 研共同研究員, 法政大学)

贈与交換、互酬性の議論に比して、再分配が議論されることは少ない。今回、改めて再分配について、ポランニーとサーリンズの再分配に関する議論を検討して、さらに、グレーバーの財のやりとりの三態のうちのヒエラルキーの概念と突き合わせてみて、考察を深めることを目指した。

再分配という語は、内部のメンバーが平等ではなく、その最も権力が集中しているところに財が集まり、さらにそれが儀礼、祭礼、饗宴などにより、振る舞われて、分配されていくプロセスをさしているが、財が集まるプロセスについて、ポランニーもサーリンズもあまり関心を払っておらず、王や首長が儀礼、祝宴などの機会に上に立つ者から、下々にふるまわれる財の分与されるプロセスにもっぱら着目している。一方で、グレーバーのヒエラルキーの概念は、再分配のものではないが、上下関係の確定している者同士の財のやり取りについて述べている点で、再分配の概念に最も近いといえる。そこでは、贈り手が受け手に対して優位にたち、受け手は負い目

を追う、という互酬性の議論があてはまらないし、上下関係は財の受け渡しによって変化したりしないとグレーバーは述べる。ここで、グレーバーは負い目（負債）には言及しないが、小田の再分配の図式が大変参考になる。小田によれば、再分配は、下位者が上位者に対して無限に負い目をもつ、というもので、下位者が上位者に貢納を行っても下位者と上位者の関係が変わるわけではない。

ただし、このような再分配の集団内での中心への財の移動とその逆の動きは、理念型としては理解できるものであるが、それが集団内での中心が所与のものとなっている限り、それは権力と財の移動がどう絡み合うか、どのように権力が生成するかを語るものではない。そこで、互酬的交換から財が集まりそれが首長の権力と合致するトロブリアンド諸島のウリグブの例、互酬的贈与交換で成り立っているものの、そこでいかに大きな財の集積がなされるかがビッグマンの威信につながるメルパ族のモカの例、互酬的贈与交換に多くの財の集積を依存しながら、巨大な財の集積が首長の威信を作るサモアのファアラベラベ交換の例についての検討を行った。

（文責 山本）

中国における貨幣の起源？

柿沼陽平（早稲田大学）

報告者はこれまで中国古代における貨幣経済の持続と転換の問題について検討してきた。本報告ではその要点を説明すると同時に、それがグレーバー『負債論』、ならびに経済人類学の理論的考察とどのような関係にあるのかを論じた。

中国最古の貨幣といえば、ふつう殷周時代の寶貝が挙げられることが多い。だが、寶貝の歴史を正確に知りたければ、当時しるされた文字史料、すなわち殷周時代の甲骨文・金文を読まねばならない。さらにその時代の遺跡の出土状況を調べ、出土寶貝を悉皆調査せねばならない。それによると、殷周寶貝はキイロダカラが中心で、その分布は黄河流域に偏在し、それはおもに殷王族間の贈与交換物として機能していた。それは生命と再生のシンボルだった可能性が高く、いわゆる貨幣としてした例はない（西周後半に土地価格の計算手段としてわずかに例外的に登場する程度である）。これは、物々交換神話を批判したグレーバーの見解と揆を一にする。また動詞の「買」は春秋時代頃、「売」は統一秦代によりやく登場するため、春秋戦国時代に貨幣経済が展開していたか否かは、少なくとも文字史料からは確定不可能である。それ以降、中国では銭・布帛（麻・絹）・黄金が貨幣として流通し、後漢時代には「守銭奴」等の語も生まれた。だが貨幣経済の高まりとともに、一部の思想家達がかえって贈与交換に希望を見出すに至り、おおむね二世紀頃からは貨幣経済と贈与交換の二重運動が活発化する。また人びとは貨幣を用いる場合に、市場ではそれを経済合理的に使用する一方、郷里社会ではつねに社会に埋め込まれた形で使用していた。

（文責 柿沼）

ポスト・ヒューマン時代の〈人間経済〉：構想と展望

佐久間寛（AA 研共同研究員，明治大学）

佐久間は負債論研究のあらたな指針として、「人間経済」を主軸とした以下の展望を論じた。ポスト・ヒューマンの思潮下では、人工知能の発達や環境問題の深刻化を背景に、主体としての「人間」が客体としての「非人間」を支配するという近代的前提が問いなおされている。本研究では、人間を含む万物を商品化＝「非人間化」する市場経済の力と、これとは逆に自然を含む万物を「人間化」する経済、すなわち「人間経済」の力に着目して、人間と非人間の関係を動態的プロセスとして捉え返す。とりわけアジア、アフリカ、オセアニアなどの「グローバル・サウス」は市場経済の破壊的作用が強いからこそ、人間経済の創造的作用が顕著に発揮されている。「サウス」における市場経済と人間経済の界面を①労働とケア、②土地とコモンズ、③貨幣とデット（負債＝負目）という課題別に研究することで、ポスト・ヒューマン時代における「人間とは何か」という問いに挑む。

次に、こうした展望のもと、本年度および来年度以降の計画について議論した。今年度の主要な事業としては、10月と2-3月に2度の研究会を行うことに加え、①合評会「吉村竜『果樹とはぐくむモラル：ブラジル日系果樹園からの農の人類学』」（9月28日、明治大学和泉キャンパス）、②展示企画「トカラ列島の人間経済：稲垣尚友の経験を通じて」（11月、明治大学和泉キャンパス）、③国際研究集会 Symposium on the 60th Anniversary of Karl Polanyi's Death "Debt and Money in the Human Economy"（12月21日、明治大学駿河台キャンパス）を実施する。これらの事業はいずれも人間経済概念を主軸に負債の問題を捉え直すことを見据えた内容となっている。また出版事業として、①『負債と信用の人類学』英語版、②"Debt and Money in the Human Economy"の商業出版、③ポランニー日本語版論集、④最終成果論集を進めていくことを確認した。

以上の報告に対し参加者からは、おおむね好意的な反応が得られる一方、具体的な研究内容については課題がのこる点が指摘された。

（文責 佐久間）